

奈良 いのちの電話

2015
秋
第362号

特集

児童虐待の現場から考える

吉岡 章氏・河村 喜太郎氏

社会福祉法人 奈良いのちの電話協会

事務局／〒631-0816 奈良市西大寺本町8-27



TEL : 0742-35-0500

FAX : 0742-35-0533

e-mail : nid@nara-inochi.jp



秋の心

画・おがわまな

♪
どんぐりころころ…
♪

風 鐸

皆さんは「旅」と聞いて、何を連想されるでしょうか。「新幹線」「スーツケース」「修学旅行」「温泉旅館」…。私も色々なところへ旅をしてきました。国内は47都道府県すべて行ったことになります。

今年、外国人観光客が過去最高を更新したとのこと。これは経済面でも外交面でもいいことです。世界か

ありがたいことに、旅の思い出はだいたい良きものです。ただ「もう一度行ってみたい」というところもなかなかないものです。そう考えると「旅」は、その場その場で様々なことを経験すること自体に意味があるのかもしれませんが。

らみた日本はどのように映っているのか？日本のどこに魅力を感じているのか？興味深いところです。

さて、最初の問いに「人生」と連想された方もおられるでしょう。山あり谷あり。出会いあり別れあり。苦しみながら楽しみながら、長い坂を仲間と登って行く。一生をそのようにとらえることは、まだまだ私には難しいことです。

(樹)

公開インタビュー

児童虐待の現場から考える

吉岡 章氏

小児科医 前奈良県立医科大学理事・学長
奈良児童虐待防止ネットワーク「きずな」代表

河村 喜太郎氏

社会福祉法人飛鳥学院理事長
奈良児童虐待防止ネットワーク「きずな」副代表・事務局長

聞き手 植村 圭子（奈良いのちの電話協会理事）

ここ数年、新聞の紙面で児童虐待の記事を頻繁に目にするようになった。奈良いのちの電話でも被虐待経験を引きずり、大人になっても苦しんでいる相談者の声をたびたび聞く。また、子育て支援の「奈良すこやかテレフォン」や子ども専用フリーダイヤル「チャイルドラインなら」にも切実な悩みを訴えてくる人がいる。小児科医として、また児童養護施設の理事長として、長年子どもの虐待に取り組んで来られたお二人に話を伺うことでこの問題に対する理解を深め、今後の電話相談の対応に生かしていきたい。

● 吉岡章氏のお話

私のアイデンティティは小児科医です。小児科医は子どもの健康と命を守ることが使命です。小児がん等多くの重い病気に出会って来ましたが、その中で最も辛い思いをし、気がかりなものの一つが児童虐待です。私が医師になって5年目の昭和50年当時は、日本では具体的な症状から虐待という診断をつけることは大変難しかったのです。しかしその時出会った重篤な児童虐待例が、私がこの道を専門の一つにしようと思うきっかけになりました。そしてどうにかして未然に防ぎ、社会問題として少しでも解決していかなければという思いから平成12年に立ち上げたのが奈良児童虐待防止ネットワーク「きずな」です。奈良大学の故 藤掛永良先生が代表をされ、その後平成25年から私が代表を務めています。

虐待には①身体的虐待②性的虐待③ネグレクト（育児放棄）④心理的虐待（言葉や態度による）があります。かつては身体的暴力が虐待のすべてとされていたのですが、今は心理的虐待やネグレクトが多く、また幾つか組み合わさっていま



吉岡 章氏

す。加害者は実母・実父が多いのが実情です。一昨年の全国の児童相談所における虐待相談件数は7万3千件という結果が出ています。しかしこれは氷山の一角でしょう。平成12年の児童虐待防止法の施行により通報が義務化され、さらには今年「☎189 いちはやく」という3ケタの虐待通報番号が設けられました。これはとても大きな前進と言えるでしょう。

「虐待かな」と感じた時、考えてみてください。まずしつけと虐待はどこが違うのでしょうか。しつけは子どもの現在と将来の健全な育成を願うものであり、常識的範囲で行われるべきものです。いくら親が子どものためと言っても、子どもにとって有害であればそれは虐待です。相談を受けるなかで虐待と感じた時、この家庭のどこに問題があるのか、聞きながら頭の中で整理することが大事です。経済的問題から成育歴も含めた親を取り巻く環境など多くは親側に要因があります。しかし子ども側の要因ということもあるのです。子どもに責任があるという意味ではなく、親が思い描いていたのと異なる状況、こうであってほしいという親の願いと子どもの現実とのギャップ、そういうものが虐待の土壌を生むことがあるのです。虐待は連鎖し、世代をこえると思いますが、その人の親はどうだったのかということまで思いを馳せながら、わかろうとすることが大切です。



（厚生労働省HPより）

● 河村喜太郎氏のお話

私の基盤は社会福祉法人飛鳥学院です。飛鳥学院は材木業をしていた父が昭和24年に児童養護施設として設立しましたが、もともとは昭和20年10月に、戦災孤児・浮浪児と言われる子どもたちの保護を目的として始めたものです。その後時代の変遷とともに保育所開設、学童保育の設置、そして平成12年に児童家庭支援センターを相談援助の専門機関として開設し、地域における子育ての社会支援に取り組んでいます。

児童養護施設で保護する子どもたちの問題も家族の変遷とともに変わってきています。昭和20年代は戦災孤児を始めとして大半が夫との死別による母子家庭の子どもでしたが、昭和30年代高度成長期になると離婚によるひとり親家庭等の家族の問題から生じたケース、そして徐々に被虐待児の問題が増えてきました。

現在全国で7万件を超える虐待件数に対して社会的養護を受けられるのは年間4千人です。この数字のギャップの間にいる子どもはどうなっているのでしょうか。

子育ての社会支援という観点から考えると、児童虐待の問題を虐待があるか無いかの物差しで測るだけでは、本質を見誤るのではないかと思います。本来子育てとはどういうものなのか。私は子どもの社会的自立を目指すことだと思います。ところが若い世代の実態を見ると、不登校・引きこもり・フリーター・ニートなど何百万人という若者が社会人として自立しているようには思えません。このことと現在の家族の実態とを合わせて子育ての問題を考える必要があると思います。



河村 喜太郎 氏

経済成長率1パーセント以下という成熟社会の中で、かつてあった「地域社会」の力、「家族」の持っていた力は弱まり、家族の孤立化が進んでいます。その中でも母子家庭の貧困は子どもの貧困に直結し、深刻な社会問題になっています。このような状況を考えると、個々の家庭だけでは子育てを担うことには限度があるのではないのでしょうか。児童家庭支援センターなどでも現在たくさんの問題を抱えています。親にゆとりがなく放置されている子どもに対してどのような形で援助したらいいのか、施設運営だけでなく地域社会が何を求めているか、在宅で子育てしている親をどう支援していくか社会的に子どもを養護していくための課題は山積みです。そのことに取り組むことで虐待の予防につなげたいと思っています。(M・A)

○インタビューを終えて



植村理事

今の社会は子どもの数が減少しているということに加えて、親の子育て機能に対しても、疑問や不安を抱きたくなくなるようなものが漸増しているということを改めて実感した。

子どもをめぐる社会で貧困問題がクローズアップしている一方、家庭では親たちが子どもたちの行動に手の下しようがなくお手上げ状態に陥り、保護責任者の立場を放棄してしまったような事件も生じている。こんな社会のなかで傷ついた子どもたちの心身を懸命に手当てし、一人ひとりの自立を助けようと努力されるお二人の話から、心に沁みる示唆をたくさんいただいた。

私たちが日々電話相談をとおして耳にする子育てに不安を抱く親たちや、一方どれだけ傷つけられても親をかばう子のいじらしさなどに接するとき、救いようのないこの落差の間で、つい両方の辛さをいっしょに共有し立ち尽くしてしまうことすらある。

そんなとき、お二人の語りから得た大局観を思い出して、この社会の力と良心に勇気を得て、今ここで当面している親子のあり方に正面からいねいに寄り添いたいとつくづく思わされた。(植村)

情報化社会のなかで考える

本会 ②

—— デジタル時代に思う ——

奈良日日新聞社社長

藤山 純一

新聞業界に入って今年で39年になる。「新聞記者になりたい」と思ったのは、小学校時代に当時、放映していたNHKのテレビドラマ「事件記者」に感動したからである。事件の背景にある人間模様を解きほぐし、真実を浮かび上がらせていく。その記者の生き様に「正義感にあふれカッコいい」と子どもの頃に心躍らせたものである。

事件現場に何度も足を運び、気の遠くなりそうなぐらい目撃証言を集める作業を繰り返す刑事に、記者も食らいつきながら真実を暴きだしていく。まさに人と人のぶつかり合いの仕事だ。

お陰さまで大学ではバリエードなどを築き少し寄り道したが、何とか新聞社に入社できた。そして、立場や会社は変われども40年近くも自分のしたい仕事をやらせていただいていることに、今は感謝の思いでいっぱいだ。

ただ新聞社と言っても仕事はいろいろである。記者や新聞製作、広告業務やイベント事業、新聞販売店の対応など新聞を売る仕事もある。これらの業務のほぼひと通りは携わらせていただいたが、幸いだったのが一貫して記事を書く機会に恵まれたということだ。

入社当時は15文字5行の原稿用紙に鉛筆で記事を書く。本社から遠い支局記者は写真フィルムと一緒にバス便に乗せてもらって本社に送る。デスクからは「こんな記事、使われるか!」と目の前で破られ、ゴミ箱に捨てられるという、悔しい思いをしたことを今も覚えている。

制作現場は鉛から印字したフィルムを張り付ける作業に変わろうとしていた。そしてワープロからパソコンに変わり、今ではデジタル時代到来でどこからでも何時でも記事や写真が自由自在に送れる、全く便利になったものである。インターネットですべてががつながってしまう時代である。

しかし、何か忘れてはいないだろうか。人と出会った時、その人から発せられる言葉と同時にその人の表情や思いに出会っているだろうか。同じ言葉でも発する人の表情や態度、その人との関係性によって意味合いが違ってくる。これまでの39年の仕事人生、楽しく過ごさせていただいたのは素晴らしい出会いがすべて。人と人とのぶつかり合いの出会いがあつてこそ、豊かな人生が送れるのではないだろうか。(当協会広報委員)